漢 文 学 会略 史

九三二年 (昭和七年)

式行われる。資料A参照 二月二十日 午後一時より本館第二会議室において漢文学会発会

学会顧問となる。学会会長諸橋轍次。 三月三一日 初代学会会長島田鈞一、 東京文理科大学教授を退任、

小林信明「原始儒教に於ける指導原理の展開に就いて」。 五月二一日 第一回研究発表会(於漢文学研究室、以下漢研と略)。

夷伝と我が国体士風」。 台嶺「漢文教育に関する諸問題」、 六月十一日 春季講演会(於第二会議室、 高田真治「学」、 以下第二と略)。内野 中山久四郎「伯

十月十五日 第二回研究発表会(於漢研)。上島一夫「陶淵明 0)

十一月十二日 詩境」、小島政雄「伏犧卦を劃すの伝説に就いて」。 秋季講演会(於第二)。寺田范三「読注疏 『本』字

十二月 考」、牧野巽「漢族王侯の相続制度」。 内野以下十名「北支満鮮旅行談」、佐藤正範「旅行談を承り 三日 第三回研究発表会(於漢研)。唐卓羣「宿命説に 9

(昭和八年

「戴東原に就いて」、 二月十八日 第四回研究発表会、 田口福司朗 附講演会 「覚者と学者」。講演、 (於漢研)。 小沢文四 岡井慎吾

王観堂の一面」。

印刷所、 三月 東京都荏原区戸越町一二九八、市川活版所。発行所、 十日 〈漢文学会々報〉 第一号発行。 編輯者 上 島 東京

文理科大学漢文学会。

に就いての所感」。 五月二七日 第五回研究発表会(於漢研)。 田波又男「漢文教授

春季講演会(於漢研)。森本角蔵「年号引分

の

典

に就いて」。藤村与六「易の体系に就いて」。

六月十七日

郎「聖徳太子と支那思想」。講演、 九月三十日 七日 森本・熊坂・岩井三先生支那旅行座談会 第六回研究発表会、 北平東方文化事業部橋川時雄「北 附講演会 (於漢研)。 市川本太 (於漢研)。

十一月 十月十三日 四日 橋川時雄先生帰朝歓迎会 秋季講演会 (於第二)。有高巌「古代儒家の法律観」、

(於新宿白十字)。

平支那学界雜観」。

十二月 山口察常「師道に就いて」。 二日 第七回研究発表会 (於漢研)。 渡辺末吾

一九三四年(昭和九年)

いて」、中西清「中等学校に於ける漢文教授の実際に就いて」。

「楽律

に

就

に残存せる支那古韻に就いて」、上島一夫「楚辞離騒篇私考」。 二月 十日日 第八回研究発表会(於漢研)。 松村利行 「日本 書 紀

昭和九年一月末残高六二円三五銭。会報第一号の出版費用九二円七二月二五日 〈漢文学会々報〉第二号発行。編輯者、竹倉二郎。

〇銭。

| TH 第一回所記备受会(冷漠所)のジは重催「沢建芳でより上京なされた」。午後六時茗渓会館で同氏歓迎会。| 塩」。「去る廿日より一週間の予定で支那小説史講義に遙々鶏林の都壇」。「去る廿日より一週間の予定で支那小説史講義に遙々鶏林の都十月二四日 秋季講演会(於漢研)。辛島驍「満州事変と中国文

竹倉二郎「三年の服喪期間に就いて」。十二月 一日 第十回研究発表会(於漢研)。杉本重雄「釈奠考」、

一九三五年(昭和十年)

説に就いて」、三井宇一郎「朱子の孝経刊 誤に 就 いて」、大島正健二月二三日(第十一回研究発表会(於第二)。小沢 文四郎「卦気

元の韻の構造」。

中心として」、清華大学教授銭稲村「北京学界の現状に就いて」。方文化研究所研究員結城令聞「長安の古蹟を訪ねて――仏教史蹟を

一九三六年(昭和十一年)

訓に就いて」。 ・ は説に就いて」、松村利行「『至』の古韻と万葉集・風土記の誤の論語注に就いて」、杉本重雄「漢代の博士に就いて」、福家弘「康有為性説に就いて」、杉本重雄「漢代の博士に就いて」、岡 阪 猛 雄 「朱子の二月十九日 第十三回研究発表会(於第二)。岡 阪 猛 雄 「朱子の

六月二十日 春季第二回講演会(於第二)。早稲田大学教授津田於ける支那学研究の一端」。学習院教授渡辺末吾「六笙詩考」。 五月三十日 春季第一回講演会(於漢研)。中山久四郎「欧米に

三月十五日

〈漢文学会々報〉第四号発行。

編輯者、

松村利行。

左右吉「支那思想についての一二の思いつき」。

王魯説に就いて」、高木仡「我国に於ける漢文訓読」。 九月二六日 第十四回研究発表会(於漢研)。鎌田正「新 周 故 宗同日 寺田范三先生十三経注疏読了紀念会(於茗渓会館)。

渓会館)。 同日 内野先生教授昇格祝賀会並に岡井博士歓迎会(於茗

十二月 五日 秋季講演会(於第二)。東洋大学教授古城貞吉「支現代詩潮の一瞥」、石島快隆「頼山陽全書を読む」、下山田光平「喪現代詩潮の一瞥」、石島快隆「頼山陽全書を読む」、下山田光平「喪現代詩潮の一瞥」、石島快隆「頼山陽全書を読む」、下山田光平「喪現代詩潮の一瞥」、石島快隆「頼山陽全書を読む」、下山田光平「喪現代詩潮の一覧」、石泉が高い、東洋大学教授古城貞吉「支

一九三七年(昭和十二年)

那文学と必読書」。

東

十一月三十日

秋季第二回講演会(於新館三五五心理学教室)。

本荘子郭象注十二種について」、米山尚之「噬嗑について」、米山寅二月十三日(第十六回研究発表会(於会議室)。寺岡龍舎「敦煌一月二九日(諸橋教授御講書始御進講紀念祝賀会(於茗渓会館)。

太郎「左伝私考」。

で、学会会費年額一円を昭和十二年度から二円に改める。「東京文理科大学漢文学会会則」を掲載。会報年二回発行等の理由三月二五日(漢文学会々報〉第五号発行。編輯者、米山寅太郎。

長小林信明「挨拶」、土肥輝雄、松下厚「行程」、内藤由己男「政治」、る三月十八日より四月初旬にかけて、北支、満鮮方面を旅行」。団五月 三日 「支那旅行団」有志報告会(於新館本部会議室)。「去

災異説について」、竹田復「話本の入話について」。 六月十九日 春季諧演会(於新館本部会議室)。小林信明「春秋

吉田元定「教育」、陳蔡煉昌「風俗

雄「離騷靈均私考」、上原好一「繋辞伝『象・辞』考」。 十月 二日 第十七回研究発表会(於新館本部会議室)。土 肥輝

より支那留学を命ぜられて、 学会彙報」に 壮途に就かれた」、「会員本学々生、 田上部隊に属し、 五.日 「会員消息」欄を設け、 〈漢文学会々報〉第六号発行。編輯者、上島一 目下、 去る拾月拾日 上海戦線に於て奮戦中である」と伝え 助手小沢文四郎が 堀池敬君は去る八月出征さ (日) 午後九時、 「外務省 東京駅 夫。

教を通じて見たる漢民族死生観一考察」。論を中心として見たる朱子学陸学」、松下忠「五典考」、植田袖「儒十一月十三日(第十八回研究発表会(於会議室)。内藤由己男「太極

と儒教思想に就て」。
十二月 四日 秋季講演会(於会議室)。宇田尚「我国現下の情勢

一九三八年(昭和十三年)

昌「永明声韻説」。 子における太極と理気の関係」、吉田元定「四家詩源流考」、陳蔡煉子における太極と理気の関係」、吉田元定「四家詩源流考」、陳蔡煉「朱一月二九日(第十九回研究発表会(於第一会議室)。坂柳童麟「朱

穆堂島田釣一先生追悼号」。会報第五号印刷代、「一一三円一四銭」、三月十七日 〈漢文学会々報〉第七号発行。編輯者、田 口聖 一。

第六号、「一四〇円」。

「北支学会の近況について」。四月三十日春季第一回講演会(於新館本部会議室)。

諸

橋

轍

次

八について」、尾関富太郎「新注の伝来と其の前後」。十月十五日(第二十回研究発表会(於新館会議室)。田口聖一「之

を懸念して早く切り上ぐ」。十一月二十日 〈漢文学会々報〉第八号発行。編輯者、田口聖一。十一月二十日 〈漢文学会々報〉第八号発行。編輯者、田口聖一。十一月二十日 〈漢文学会々報〉第八号発行。編輯者、田口聖一。十一月二十日 〈漢文学会々報〉第八号発行。編輯者、田口聖一。

く」。 お帝国大学教授倉石武四郎。「氏の上京を機とし聘して講演会を開帯帝国大学教授倉石武四郎。「氏の上京を機とし聘して講演会を開け一月二九日~十二月一日 秋季特別講演会(於本部会議室)。京

| 九三九年(昭和十四年)

ける神儒調和思想」。
考」、佐川修「董仲舒の陰陽説に就きて」、古沢未知男「水戸学に於考」、佐川修「董仲舒の陰陽説に就きて」、古沢未知男「水戸学に於一月十八日(第二二回研究発表会(於漢第一)。佐田弘道「三論小

五月六日 「北支満鮮旅行団報告座談会」(於漢文学第二研究室、三月二五日 〈漢文学会々報〉第九号発行。編輯者、田口聖一。

方面を旅行」。団長内野熊一郎。以下漢第二と略)。「去る三月二日より四月初旬にかけて、北支満鮮

に於ける博士家の活動とその持本について」、内野熊一郎「自著『秦六月十七日 春季第一回講演会(於本部会議室)。川瀬一馬「中世

代に於ける経書経説の研究』に対する略述」。

大島一「子見南子について」。
十月二八日 第二三回研究発表会(於漢第一)。石山輿武「謎」、十月二八日 第二三回研究発表会(於漢第一)。石山輿武「謎」、

十二月一日 〈漢文学会々報〉第十号発行。編輯者、大島一。

九四〇年(昭和十五年)

京帝国大学魚返善雄「支那語学習の能率化」。 六月十五日 春季講演会(於第二)。小沢文四郎「在燕雜感」、東

朴楚亭と清朝文化」。 十月二六日 秋季講演会(於西館五一号室)。藤塚鄰「李朝の名賢

一九四一年(昭和十六年)

寸描」、髙橋俊英「老子年代考」。の一左証としての爾雅の形態の歪曲に就いて」、仲井真盛信「胡適の一左証としての爾雅の形態の歪曲に就いて」、岩佐貫三「経書研究一月二五日(第二四回研究発表会(於第二)。岩佐貫三「経書研究

二月二十日 〈漢文学会々報〉第十一号発行。編輯者、仲井真盛

二月二二日 第二五回研究発表会。月洞譲「儒教思想の近世的理を一回に、「内容は会員の研究論文を主とする」と告げる。信い局柄、用紙節約、頁数減少等の通牒に接し」、年二回の発行

式の二三の考察」、大木春基「徳の日本的解釈」。とその時代」、市川憲一「梁任公について」、荒木雄二「詩経表現形とその時代」、市川憲一「梁任公について」、荒木雄二「詩経表現形十一月 第二六回研究発表会。市木武雄「黄宗羲の学の成立念」、牛島徳次「儒林外史に於ける『的』字其他の用法について」。

について」。思想」、新見保秀「小学と大学の由来」、内田龍「左伝に於ける君子思想」、新見保秀「小学と大学の由来」、内田龍「左伝に於ける君子十二月(六日)第二七回研究発表会。栗原喜男「中庸に於ける人性

十二月二六日 卒業繰り上げにより学生卒業。

一九四二年(昭和十七年)

出来ることゝ思います」、「会員諸氏の御健闘を御祈り致します」。行の予定のものが非常に遅れ申訳ありません。次号は本年中に発行行の予定のものが非常に遅れ申訳ありません。次号は本年中に発行に離検記」(昭和十七年二月寺尾記)に「種々の事情から昨年中発印刷所、太陽舎。印刷人、小谷寛。これ以後、学会報休刊となる。六月二十日 〈漢文学会々報〉第十二号発行。編輯者、寺尾達郎。六月二十日 〈漢文学会々報〉第十二号発行。編輯者、寺尾達郎。

一九四六年(昭和二一年)

命 Io 五月二四日 研究会。藤川正数「戦争道義の問題」。原寓男「方法

論し。

十二月 六日 研究発表会。藤川正数「孟子管見」、今井宇三郎「明十一月十六日 講演会。会長竹田復「漢文教育の将来」。

代語録に於ける伝習録の地位」。

九四七年

話に就いて」、米山寅太郎「毛詩詁訓伝に就いて」、小沢文四郎 案備忘録」、原富男「世」。特別講演、諸橋轍次「行不由径」。 辺弘一郎「三刑説に就いて」、荒井栄「儒教の再認識」、 - 日本漢学史上(奈良朝まで)の諸問題」、土肥輝雄「梵辞の崑崙神 五月二五日 漢文学会総会。研究発表、牛島徳次「釈有来」、 尾関富太郎 一学 渡

十月十二日 講演会。東大教授加藤常賢「皋陶の名義に就いて」。 十月二三日 講演会。謝冰心「中国現代文学に就いて」。

六月十一、十三日 卒業論文発表会。

十一月二十、二一日 卒業論文発表会。

一九四八年(昭和二三年)

の実態」、網祐之「督輩に就いて」。 田正「経学の成立に就いて」、松下忠「和歌山師に於ける漢文教育 水沢利忠「春秋に於ける君子の性格」、 十一月十二日 漢文学会総会。研究発表、緒形暢夫「術に就いて」、 三郎「無極而大極の一考察」。 の一考察」、水沢利忠「左伝に見える君子の性格に就いて」、今井宇 五月 八日 研究発表会。安居香山「正始学に於ける王弼の立場 加賀栄治「爾雅釈訓考」、 鎌

一九四九年(昭和二四年

二月十二日 卒業論文発表会。

六月二五日、 十月八日、 十一月十六日 卒業論文発表会。

九五〇年(昭和二五年 五月二十日 講演会。早大教授福井康順「中国思想より見たる聖

に就いて」、松下忠「紀州藩の漢文学の全貌」、寺岡龍含「新学制上 香山「中国古卜考」、伊藤文定「王肅に就いて」、藤川正数「塩鉄論 賀栄治「史記引尚書の訓詁的考察」、水沢利忠「甲骨学管見」、安居 刊行準備委員会が組織される。研究発表、緒形暢夫「法の構造に見 の漢文学のあり方」、小沢文四郎「戴東原学術遡源」。 える韓非の思惟に就いて」、塚本正「毛詩源流に関する一考察」、 一九五一年(昭和二六年 七月 六月二四日 六月十七日 六日 卒業論文発表会。 昭和二六年度漢文学会総会(於教育大学E四〇三教 漢文学会総会。学会機関誌復刊が了承され、 飯田吉郎「関干 機関

理念」、裏善一郎「薩南学派の祖『桂菴』について」、今井宇三郎 解釈史(第一期)研究序説」、伊藤文定「史記に現はれた漢代礼制の 全』について」、松下忠「紀州藩の明律学」、寺岡龍含「漢文学習法 正義版本考」、鈴木修次「詩と史実(作詩時代考)」、加賀栄治「『経 董西廂的異文」、千原勝美「墨子に関する一考察」、 学上より見たる本邦旧鈔古文孝経隷古定に就て」、 室、以下E四〇三と略)。会長竹田復。研究発表、青木木蒐哉「文字 「黄老思想の成立について」、古沢未知男「僧義堂の文学観『禅文兼 水沢利忠「史記

福司郎「教材としての論語について」。

の革新と教育職員免許法関係法規の改正すべき点について」、

田口

九月二八、二九日 卒業論文発表会。

任者、小沢文四郎。印刷所、 十一月十五日 〈漢文学会々報〉復刊 される。総第十三号。 - 学会彙報」に「終戦以来の本学会及び研究室の動向」掲載される。 一誠社印刷所。資料B参照 編輯責

重沢俊郎「柳宗元の思想」。十一月二十日 秋季講演会。谷川英則「連語について」、京大教授十一月二十日 秋季講演会。谷川英則「連語について」、京大教授井字三郎)は委員の互選に依る。学会費年額百円、学生五十円。れば、学会会長は主任 教授(竹田復)、委員九名、委員長一名(今「東京文理科大学漢文学会会則・昭和二六年六月二十日 現在」によ

一九五二年 (昭和二七年)

七月 四日 卒業論文発表会。

一九五三年(昭和二八年)

二月二十、二一日 新制卒業論文発表会。

六月二五日 〈漢文学会々報〉第十四号発行。文理科大学改組

京教育大学漢文学会会則」掲載される。資料B参照。第一期までの漢文学科学生「卒業論文題一覧表」、及び新たな「東今井字三郎。印刷所、株式会社正興社。文理科大学第一期から新制件い東京文理科大学漢文学会会報としての最終記念号。編輯責任者、

研究発表、木村郁二郎「論衡の『故』と『偶』について」、背木木四百円、学会報は毎年、会員名簿は隔年発行、広告掲載可等を了承。六月二八日 昭和二八年度漢文学会総会(於E四〇三)。学会費

ついて」、寺岡龍含「漢文教育の基本的考察」。ける入声配置について」、牛島徳次「史記に於ける規定部の位置に明文庫本五行大義の性格について」、坂井健一「『切韻指掌図』に於照文庫本五行大義の性格について」、坂井健一「『切韻指掌図』に於原』、今井宇三郎「老子王注に於ける無と有の問題』、中村璋八「陽思想より見たる法家思想とその背景」、伊藤文定「尚書孔伝の一考蔲哉「甲骨卜辞制作の上限について」、緒形暢夫「慎到、韓非の法

一九五四年(昭和二九年)

なし。学会会長、中西清。資料C参照。学会会報としては第一号。印刷所、株式会社技報堂。編輯者の記載学会会報としては第一号。印刷所、株式会社技報堂。編輯者の記載六月二五日 〈漢文学会々報〉第十五号発行。東京教育大学漢文

金子彦二郎「章孝標の詩と日本文学」。 本文学に影響した老子」、今井宇三郎「不真空論の本無について」、本文学に影響した老子」、今井宇三郎「不真空論の本無について」、 新美保秀「日して隷古定の再考察に及ぶ」、水沢利忠「龍谷大学本『史記抄出』に表、木村郁二郎「王充の賢者論」、青木木菟哉「旧鈔古文孝経を通表、木村郁二郎「王充の賢者論」、青木木菟哉「旧鈔古文孝経を通

一九五五年(昭和三十年)

K

微」。二月十九日 例会。飯田利行「日本漢文学史上における良寛の薬二月十九日 例会。皆木木莬哉「甲骨断代研究の考察」(注一)。

六月十九日 〈漢文学会々報〉第十六号発行。編輯者、東京教育五月二一日 例会。牛島徳次「黎錦熙『新著国語文法』について」。四月十六日 例会。今井宇三郎「心無義について」。三月二六日 例会。石島快隆「中国における哲学と神学の問題」。

大学漢文学会今井字三郎、 坂井健一(以下名前のみ記載)。

昭和三十年度漢文学会総会。 研究発表、 中 村 璋

美保秀「論語と日本文学」、 襲善一郎「『哀公問於有若』章の解釈に 哀楽説について」、鈴木修次「相和歌辞にみる歌謡文学の特性」、 緒形暢夫「魯人精神と宋人精神につ いて」、水沢利忠「嵆康の声無 神宮文庫本『五行大義背証』に引存する東宮切韻佚文について」、 新

家の意識基底に関する一考察」。 十月二九日 松下忠「太宰春台の詩文論」。 例会(於臣二一二教室)。加賀柴治「魏晋学術思想

ついてに

十二月十七日 十一月十九日 例会。 例会。 緒形暢夫「漢碑より見たる後漢末の老子思想 内野熊一郎「漢碑漢簡の資料価値

について」。 (注一)「雑誌会」は省略。「研究発表」のみ記載

九五六年 (昭和三一年)

一月二八日 例会。 鎌田正 劉歆の分野説について」。

卜辞『馭釐』 六月十七日 二月十八日 の一考察」、内山知也「唐代小説のロマンチシズムと 例会。小林信明「論語為政篇の孝乎惟孝について」。 昭和三一年度漢文学会総会。 研究発表、青木木菟哉

資料」。

いてし、 新美保秀「正平版論語源流の一考察」、今井宇三郎「五行の数につ **系譜に関する一考察」、安居香山「荘子より列子への黄帝説の展開」、** 松下忠 「王世貞の古文辞説脱化」。 講演、 小林信明 「古文尚

庶民について」、鈴木修次「豔歌について」、

書について」。

一月二四日

例会。

河野六郎

「袂字考」。

てし 十二月十五日 例会。 鈴木修次「呉歌 西 曲 K お ける 『儂』につい

一九五七年 (昭和三二年)

一月十九日 例会。 月洞譲 「鄭玄訓詁に関して」。

二月十六日 例会。 小嶋政雄

四月二十日 例会。 望月真澄 『北』音考」。

六月三十日 五月十八日 例会。 〈漢文学会々報〉 前野直彬 第十七号発行。編輯者、 「中国笑話史考」。 前野直

緒形暢夫。

同日

昭和三二年度漢文学会総会。学会会長、

内野熊一郎の

的教育体制」。 もしろさい 実相」、藤川正数「幼主の服忌に関する鳳岡と白石との論争につい 研究発表、内山知也「沈亜之と小説」、 て」、新美保秀「論語の外題について」、杉森正弥「児女英雄伝のお 鈴木修次「詩人としての曹丕の評価」、 寺岡龍含「漢文(中国文) 講演、 内野熊一郎「民国、 緒形暢夫「鄭人精神の一考 及漢文学 (中国学) 初・中期の経学観とそ 加賀栄治「魏晋玄学の の理想

加賀栄治「魏晋玄学の 古伝の論語」。 十一月十六日 例会。 新美保秀「日本文学に影響した論語並に)我国

九五八年(昭和三三年)

十二月二一日

例会。

飯田利行

「誤読せる二、三の詩文について」。

二月二二日 月十八日 例会。 例会。 伊藤文定「聖証論考」。 摺河昭彦 「術より見たる黄老」、

宮体詩について」、飯田吉郎「魯迅の評価について」。

田部井文雄

弥「大正文学に於ける中国女性像」、松下忠「王世貞と袁宏道」。漢亦「大正文学に於ける中国女性像」、松下忠「王世貞と袁宏道」。漢本武善夫刊本史記の特色について」、加賀栄治「魏晋の礼説に現れ本黄善夫刊本史記の特色について」、加賀栄治「魏晋の礼説に現れ字貞人の一考察」、緒形暢夫「衛人精神について」、水沢利忠「米沢字貞人の一考察」、緒形暢夫「衛人精神について」、水沢利忠「米沢字貞人の一考察」、緒形場と「大田」と表表、藤原高男六月二九日 昭和三三年度漢文学会総会。研究発表、藤原高男六月二九日 昭和三三年度漢文学会総会。研究発表、藤原高男

十二月六日 例会。菅野礼行「対句鑑賞発生試論」。大野知二、月洞譲、大木春基、尾関富太郎。

文教育討論会「高等学校漢文教育に於ける問題点」、長谷川節三、

一九五九年(昭和三四年)

-山台高校)。午前研究授業(青木木菟哉)、研究会。午後討議会、六月二十日 昭和三四年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立六月 六日 例会。横山伊勢雄「比興論の展開と象徴詩」。

問題提起、志賀一朗、小島政雄、鎌田正。小山台高校)。午前研究授業(青木木莬哉)、研究会。午後討議会、

晋南北柳における尊降服制について』、新美保秀「中原家論語家学次「司馬相如・楊雄・班固に流れる一流文学意識』、藤川正数「魏説に含まれる詩について』、志賀一朗「新訓点法の一考察」、鈴木修研究発表、藤原高男「江南義疏家と王弼佚注」、内山知也「唐代小研究発表、藤原高男「江南義疏家と王弼佚注」、内山知也「唐代小六月二一日 昭和三四年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。

安居香山

(以下十九号まで同じ)。

とその系統本」、

寺岡龍含

「無と和の問題」。

六月二五日

〈漢文学会々報〉第十八号発行。

編輯者、

牛島徳次、

発見せられた鄭玄論語『魯読従古』例の新資料」。十二月 五日 例会。新美保秀「我国古伝論語諸古写書入れ中より

一九六〇年(昭和三五年)

は、日本には、日本のでは 日本のでは、日本

同日 〈漢文学会々報〉第十九号発行。

ついて」。 簡の年号についての疑問」、中村嘉弘「史記にお ける 武帝朝批判に十二月(十日)例会。髙橋均「先秦諸子と堯 舜 伝 説」、田中有「漢

一九六一年(昭和三六年)

五月二十日 例会。清水栄「史記と太平記」。

清水栄「史記正義佚文の来源と真偽」、髙橋均「政権授受の方式よ六月二五日 昭和三六年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。午後研究会第二部、上原好一、鎌田正「新指導要領の問題点」、年後研究会第二部、上原好一、鎌田正「新指導要領の問題点」、小月二四日 昭和三六年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立六月二四日 昭和三六年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立

の知識人論」、 りみたる孟子の政治思想」、 「現行本易緯と易緯佚文とについて」、 内山知也「『補江総白猿伝』の成立年代について」、 田中有 「居延漢簡に関する一考察」、 木村郁二郎「毛沢東 ф

大学漢文学会代表者内野熊一郎(以下二二号まで同じ)。 同日 〈漢文学会々報〉第二十号発行。編輯者、 東 京 教育 前野直彬「唐詩における自然について」。

七月 八日 例会。沼口勝「六朝の遊仙詩について」。

横山伊勢雄「滄浪詩話の問題点について」。 例会。 望月真澄「書評、 藤堂明保著『中 国語音韻

十月

七日

十一月 四日 例会。 高橋稔「六朝志怪の民話性に つい て

修次「文学史における『進歩』について」。

一九六二年(昭和三七年)

二月 三日 四月二三日 巨勢進「詩経の頌について」。 二月例会。安居香山 講演会(於教育大学)。京都大学教授吉川幸次郎「中 「中国古代人の世界観につい

国研究の意義」。

五月二五日 〈漢文学会々報〉第二十一号発行。

勝美「明治初期、 する懐疑と不信について」、 沼口勝 台高校)。 六月二四日 六月二三日 「六朝の詠懐詩について」、中村嘉弘「司馬遷の『天道』に対 研究授業 昭和三七年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。 昭和三七年度漢文学会総会漢文教育研究会(於赤城 松本辺における漢学の様態」、 (月洞譲)、 許常安「詩に反映せる日清戦争」、 研究会。 加賀栄治「欧陽修 千原

の態度」、

藤川正数「王莽時代における宗廟説について」、

寺岡龍含

敦煌本南華真経書写年代考」。

九六三年 (昭和三八年

一月

許常安 「明鄭時代の愛国詩人」。

例会。青木五郎「史記における我が国の優位性」、

「董仲舒の対策せる年代についての一考」、 二月 例会。小倉勇三「文芸講話と丁玲批判」、金子彰男 沼口勝「詩語

としての

『桃花源』(又は桃源)について」。

例会。髙橋均「最近中国に於ける孔子評価の論争に

ついてし

四月二十日

鈴木

五月二五日 五月十八日 例会。髙橋稔「六朝志怪に於ける説話形成」。

六月 七日 講演会(於教育大学)。慶応義塾大学教授奧野信太 〈漢文学会々報〉第二二号発行。

六月二二日 昭和三八年度漢文学会総会漢文教育研究会 (於都

中国詩の一つの様相

郎「『第二の叙情』―

大久保隆郎「王充における頌漢思想の必然性について」、清水栄「太 志村高校)。研究授業(宮沢康造、望月真澄)、研究会。 六月二三日 昭和三八年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。

平御覧引論衡について」、高橋均「墨子の兼愛思想について」、藤原 から見た甲骨文字と金文について」、安居香山「王莽の符命につい 高男「居延木簡における鑚炊改火につ いて」、塚田清策「書道史上

て 松塘と衷枚」、小島政雄「屈原伝と楚辞の漁夫」。 古沢未知男「万葉集の虚構性作品と中国文学」、松下忠「鈴木

七月 六日 九月二八日 例会。 例会。清水栄「太平御覧引論衡について」。 田中有 「蘭亭序に関する疑問」。今井宇三郎

鈴木由次郎著 『漢易研究』。

界に於ける梁啓超評論について」。 十一月三十日 例会。 中村嘉弘「歌行と送別」、 宮内保「晩清小説

一九六四年 (昭和三九年

修次「王維の詩における『空』と『白雲』。 一月二五日 例会。青木五郎「史記索隠の注釈文的考察」、 鈴木

形暢夫「戦国策諸篇に於ける紀年の問題」。 二月十五日 例会。平松辰雄「茅盾の処女作『蝕』について」、 緒

五月 九日 例会。横山伊勢雄「梅堯臣の詩と詩論」。

六月二五日 〈漢文学会々報〉第二三号発行。 編輯者、 鈴木修次、

今井字三郎。

第二部、青木木菟哉「漢文訓読法の問題点」。 城北高校)。研究授業 六月二七日 昭和三九年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立 (設楽武志、大坂泰)、研究会第一部。研究会

勝美「藩学の解体と学校創設期における漢文の問題」、鈴木修次 いて」、清水栄「王充と司馬遷」、 大久保隆郎「王充の古典解釈について」、 六月二八日 昭和三九年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。 内山知也「沈既済と小説」、千原 許常安「丘逢甲の詩につ

の河川祭と詩経」。 九月二六日 講演会 (於教育大学)。 東大教授赤塚忠「中国古代

「詩品」の文学意識

十月二四日 「猿投神社蔵史記古鈔本について」、杉森久弥「『女誠』の近代 例会。 加治信之「王充の天人感応論について」、 清

> 「丘逢甲の詩について」、田中有「章草について」。 七日 例会。 丸山昇「魯迅の文学運動につい

十二月十二日 例会。水沢利忠「佐野文庫蔵伝宋李太白文集につい

てし 一九六五年(昭和四十年)

二月 一月二三日 六日 例会。大久保隆郎「『論衡』に現われた世界観」、 例会。 高橋均「中国見聞談」。

平

松辰雄

「革命文学論戦と茅盾」。

五月 八日 例会。 宮内保「中国近代の文学思想」、 小嶋政雄「干

支紀年について」。

編輯者

田 部

井

文

六月二五日 〈漢文学会々報〉 第二四号発行。

杉並高校)。研究授業(土屋裕、 雄、今井字三郎、大久保隆郎(以下二五号まで同じ)。 六月二六日 昭和四十年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立 井関義久)、研究会第一部。 研究会

第二部、鵜城紀元「漢文入門篇の問題点について」。

講演、 界革命』の詩について」、 委員長小林信明。宮内保「晩清期の翻訳小説」、許常安「晩清『詩 六月二七日 内山知也「沈既済と小説」、 小林信明「易の九六について」。 昭和四十年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。 清水栄「王充評価に関する二、三の問題 緒形暢夫「先秦諸子の『習俗』観」。

十月 八日 例会。牛島徳次 「新中国見聞談」。

淳之助「詩語について」。 十一月二六日 十一月十三日 諸橋轍次先生文化勲章受賞祝賀会(於茗渓会館)。 講演会(於教育大学)。お茶の水女子大学教授倉田

横山伊勢雄 十二月十一日 「蘇東坡の画論 例会。 向嶋成美 「『文心雕龍』の批評論について」、

一九六六年 (昭和四一 色

国古代の唯物論」。 一月二二日 例会。 宮内保「清末の紅楼夢評論」、大久保隆郎 中

までの茅盾」。 二月 五日 例会。 巨勢進 『三家詩』考」、 平松辰雄『子夜』

善弘「中国文字改革運動略史」。 五月 七日 例会。 高橋均「現代中国哲学の方向と問題」、 松尾

九段高校)。研究授業 昭和四一年度漢文学会総会漢文教育研究会 (田部井文雄)、 研究会第一 部 研究会第二部 (於都立

六月二五日

渡辺弘一郎「子規の『木屑録評』」。 同日 〈漢文学会々報〉第二五号発行。

六月二六日 昭和四一年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。

村郁二郎「鄧中夏について」、内山知也「許堯佐とその小説」、 宮内保「晩清の歴史小説」、大橋定雄「漢文学習指導上の論点」、木 桜田芳樹 「『固窮の節』の展開について」、前田利昭「瞿秋白と魯迅」、 水沢

十一月十九日 十月二二日 請演会 拡大例会。鈴木修次「新中国の現実と文化大革命」。 (於教育大学)。早稲田大学教授安藤彦太郎

利忠「蘆東山の思想」、牛島徳次「中古漢語の疑問文」。

九六七年 (昭和四二年

中国文化界の動向

昭 五月二十日 「抗日戦争期の周而復について」。 月例会。松尾善弘「大衆語運動に つい て 前田利

> 武蔵丘高校)。研究授業(金子泰三)、研究会第一部。研究会第二部 横山伊勢雄 六月十七日 六月十五日 (以下二七号まで同じ)。 昭和四二年度漢文学会総会漢文教育研究会 〈漢文学会々報〉第二六号発行。編輯者、 水沢利忠、 (於都立

て」、大久保隆郎「王充の命論について」、高橋稔「六朝説話の伝説 淵明の『文学ごころ』について」、中村俊也「荀子の性説形成につい 委員長鎌田正。 六月十八日 昭和四二年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。 柚木利博 「詞集『花間集』について」、 桜田芳樹「陶

大木春基「中学校の古典教育について」。

和久「文字論の対象とその方法」、鈴木修次「正始詩について」。 性と昔話性について」、田部井文雄「杜詩における老境表現」、 七月十五日 月例会。 清水久美子「草明研究」、 向嶋成美「鮑照

想について」。 擬行路難』について」。 十月十四日 月例会。 柚木利博「『詞と妓女』」、 謡口明「恵施 の思

『詩経』と孔子」。 十一月二五日 月例 会 高木重俊 「庾 信 0) 賦 に 9 し、 て 巨 一勢進

九六八年(昭和四三年)

六月十五日 〈漢文学会々報〉 六月二二日 昭和四三年度漢文学会総会漢文教育研究会 第二七号発行。 (於都立

秋川高校)。研究授業(戸井田行世)、 水沢利忠「欧米視察報告」。 研究会第 部。 研究会第二部

G三〇七号室)。柚木利博「李煜詞における表現法の特色」、 六月二三日 昭和四三年度漢文学会総会研究発表会 (於教育大学 前田利

嶋成美「鮑照の詩風について」、宮内保 志賀一朗「王陽明の『自得』につ いて」。昭和四三、四四年度委員 魯迅における『人』の概念について」、内山知也「離魂記について」、 |桓譚と王充について」、高橋均「君子につ いて」、伊藤虎丸「初期 「『白求恩大夫』改訂にみられる周而復のリアリズムの深化」、 **亀原壮夫「唐詩における直喩と隠喩について」、大久保隆郎** 「晩清における抒情につ 向 しょ

とができなかった」(「学会彙報」)。 - 教育大学における紛争により、四十三年度中に月例会をもつこ

一九六九年(昭和四四年

究会の開催を九月末に延期することを決定し、 六月二一日 四月十九日 学会委員会。「四十四年度の大会、総会、漢文教育研 全会員に通知」。

いてし における法思想について」、漢文教育をめぐるシンポジウム、問題 七月十九日 漢文教育研究会をめぐるシンポジウム、問題提起松尾善弘。 月例会(於豊島区民センター)。児玉公彦「管子書中 月例会(於豊島振與会館)。中村俊也「荀子の偽につ

提起桜田芳樹。

松尾善弘。 四第五会議室)。 作品に現れた植物について」、松尾善弘「『五四』期における蔡元 九月二十日 漢文教育研究会「漢文学研究と漢文教育」、 昭和四四年度漢文学会総会(於豊島区民センター第 中村俊也 『無為』と『偽』、 中川太郎「陶淵明の 問題提起江連隆、

内山 知也、 E 高橋均(以下二九号まで同じ)。 〈獏文学会々報〉第二八号発行。 編輯者、 漢文学会

> 十月十八日 月例会。 山中恒己 「訪中旅行報告」、 総会の総括。

九七〇年(昭和四五年)

七月十八日

月例会。山中恒己

の思想的関係についての一試論」、

近藤龍哉「文芸大衆化問題と張 「楊朱派の存在とその先秦諸

家と

第二部、 天翼について」。 学園)。研究授業(小林五佐美、大木春基)、研究会第一部。 九月十九日 講演、 鎌田正「国語科指導要領改訂案について」。 昭和四五年度漢文学会総会漢文教育研究会 (於巣鴨 研究会

今 '0 学)。佐治俊彦「左翼作家連盟と太陽社」、 水詩について」、内山知也「堀辰雄と漢文」。講演、 九月二十日 昭和四五、 沼口勝「庾信の晩年の文学について」、 昭和四五年度漢文学会総会研究発表会(於教育大 四六年度委員長鎌田正。 横山伊勢雄 中村嘉弘「謝霊運の山 小林信明「古と 「黄庭堅の詩

同日 〈漢文学会々報〉第二九号発行。

いてし 十二月十一日 月例会。堀池信夫「名家思想と『荘子』の関係に つ

一九七一年(昭和四六年)

する説に見える二子の天論の特質について」。 二月二十日 六月二十日 〈漢文学会々報〉三十号発行。 月例会。中村俊也「孟荀二子の堯舜の政権授受に関 編輯者、 今井字三郎

内山知也、巨勢進(以下三一号まで同じ)。 白鷗高校)。研究授業(太田実)、研究会第一部。 尾善弘「『学而時習之』の『習』について」、 六月二六日 昭和四六年度漢文学会総会漢文教育研究会 長谷川節三「漢文教育 研究会第二部、 (於都立

における二、三の問題点について」。

俊也「荀子の後王について」、青木五郎「司馬貞と劉知幾」、鈴木修の詩について」、松本肇「姚鼐の古文に見る美文容認の志向」、中村学)。野原薫「揚雄における諷隷について」、後藤秋正「曹植の晩年六月二七日(昭和四六年度漢文学会総会研究発表会(於教育大

について」、堀池信夫「郭象の自得について」。 十月十六日 月例会(於教育大学)。樋口靖「中国語生成 音韻論

次

「秦州時代の杜甫」。

一九七二年(昭和四七年)

六月二十日 〈嫫文学会々報〉第三十一号発行。

三田髙校)。研究授業(土屋裕、青木木蒐哉)、研究会第一部。研究、六月二四日(昭和四七年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立

会第二部、

井関義久「分析批評と漢文教育」。

学)。樋口靖「中国語補語の構造についての一考察」、中村俊也「荀六月二五日」昭和四七年度漢文学会総会研究発表会(於教育大

について」、松本靡「真中郎の文学」。

十一月二五日

月例会(於教育大学)。

堀池信夫「裴頗の『崇有論』

一九七三年(昭和四八年)

小杉順一「般若心経について」。一月二七日 月例会(於教育大学)。相原茂「『把』字句の諸問題」、

六月二九日 〈漢文学会会報〉第三二号発行。編輯者、内山知也、て」。 五月二六日 月例会 (於教育大学)。後藤秋正「魏晋の雑詩につい

六月三十日 昭和四八年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立中村俊也(以下三三号まで同じ)。

ける漢文教育の問題点について」。連隆・井関義久「漢文教育とOHP」、土屋泰男「新教育課程にお両国高校)。研究授業(糟谷一)、研究会第一部。研究会第二部、江

ける『勿忘勿助』」、渡辺弘一郎「薤のうえのつゆ」。 とり、 大久保隆郎「『論衡』明雩篇とその問題点について」、青木五郎「『荘子』の郭象注について」、田部井文雄「杜甫いて」、青木五郎「『荘子』の郭象注について」、田部井文雄「杜甫いて」、青木五郎「『荘子』の郭象注について」、田部井文雄「杜甫いて」、 西和四八年度漢文学会総会研究発表会(於教育大七月 一日 昭和四八年度漢文学会総会研究発表会(於教育大

十一月三十日 月例会(於教育大学)。松本肇「帰有光の文学」、越風の変遷について」。 中島東「戴季陶イズムに関する一考察」、山野清二郎「懐風藻の詩中島工「戴季陶イズムに関する一考察」、山野清二郎「懐風藻の詩十月二七日 月例会(於教育大学)。安藤信広「隋詩の一側面」、

一九七四年(昭和四九年)

川恵子・浜口富士雄「十全大会前後にみる孔子批判」。

究会第二部、池沢正夫「古典教育における漢文の問題」。東村山高校)。研究授業(宮沢康造、狩野二郎)、研究会第一部。研京月二二日 昭和四九年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立

同日 〈漢文学会々報〉第三三号発行。

学)。越川恵子・浜口富士雄「十全大会前後の孔子批判論文につい六月二三日(昭和四九年度漢文学会総会研究発表会(於教育大

岩崎富久雄「文字改革と批林批孔」。講演、鎌田正「朱子の春秋学」。について」、伊藤虎丸「『幻燈事件』をめぐる魯迅論のさまざま」、て」、大久保隆郎「『論衡』の『妖』について」、高橋均「孔子世家

十一月 二日 引列会(冷政穹ケ学)。 中山至「高寿邓ウ文学恵委員長牛島徳次。

安藤信広「薛道衡の文学」。十一月 二日 月例会(於教育大学)。中山至「高青邱の文学観」、

学発展史』について」、巻和泉「初期巴金と無政府主義の問題につ十一月三十日 月例会(於教育大学)。桜田 汚樹「劉大杰『中国文

一九七五年(昭和五十年)

いてし

について」、間嶋潤一「周礼解釈」。 二月 一日 月例会(於教育大学)。堀池信夫「嵆康の『獲生論』

て」、問題提起加藤蒪、若林力、渡辺修一郎、懇談会「学会 今後の大学)。漢文教育研究会シンポジウム「古典Ⅱ乙漢文の指 導に つい六月二一日(昭和五十年度漢文学会総会漢文教育研究会(於教育

、『十年-六 丁毒な毛(よいここかいで引いいの同日 〈漢文学会々報〉第三四号発行。編輯者、田部井文

藤信広「蘆思道の文学について」、相原茂「『很不+形容詞』についた月二二日 昭和五十年漢文学会総会研究発表会(於教育大学)。雄、中村嘉弘、向嶋成美(以下三五号まで同じ)。

て

大久保隆郎「『殷本紀』考」、志賀一朗「湛甘泉の『二業合一』

昆虫則聖人帰之』につき」。委員長鈴木修次。について」、水沢利忠「君山瀧川資言の為人」、渡辺弘一郎「『沢及

、省試詩題』」。 十月二五日 月例会(於教育大学)。鈴木修次「文選の詩と 唐の

詩について」、向嶋成美「魏晋の『七哀詩』について」。十二月(六日)月例会(於教育大学)。後藤秋正「西晋時代の四言

一月三一日 月例会(於教育大学)。中村俊也一九七六年(昭和五一年)

「孔広森の

『春秋』

五月二二日 月例会(於教育大学)。松本肇「表現のめざすもの」、論」、横山伊勢雄「倪瓚について」。

加藤飯「九日詩」。

練馬高校)。研究授業(加島直吉)、研究会第一部。研究会第二部シ七月 三日 昭和五一年度漢文学会総会漢文教育研究会(於都立

同日 〈漢文学会々報〉第三五号発行。

ンポジウム「古典日乙漢文の指導について」、問題提起金子泰三。

学)。間嶋潤一「鄭玄の『獲麟』解釈について」、安藤信広「顔之推七月 四日 昭和五一年度漢文学会総会研究発表会(於教育大

蓮観考」。昭和五二、五三年度委員長牛島徳次。 『娟娟』考」、中村嘉弘「元好問の喪乱詩について」、中野達「中国

の文学について」、相原茂「北京語声調の音韻論的解釈」、桜田芳樹

上正美「阮籍詠懷詩の裘現構造について」。十一月十三日 月例会(於教育大学)。松本肇「柳宗元の文学」、

大

て」。十二月四日月例会(於教育大学)。伊藤虎丸「故事新編につ十二月四日月例会(於教育大学)。伊藤虎丸「故事新編につ

Ų,

九七七年 (昭和五二年

九二九年の創造社」、横山伊勢雄「謝榛の詩法について」。 二月十九日 月例会(於教育大学)。小谷一郎「一九二七年~一

論会「今後の漢文教育研究会のあり方」。 院高等科)。研究授業(間嶋潤一)、研究会第一部。研究会第二部討 六月二五日 昭和五二年度漢文学会総会漢文教育研究会(於学習

同日 〈漢文学会々報〉第三六号発行。編輯者、水沢利忠、

中村嘉弘。

六月二六日 昭和五二年度漢文学会総会研究発表会(於教育大学

いて」、菅野礼行「白居易の詩における『雪・月・花』について」。 ついて」、松本肇「韓愈について」、宮内保「清末民国初の文学につ G三○七)。加藤敏「陳子昂の詩について」、 中山至「高啓の楽府に

後の委員会で新委員長に水沢利忠。

総会の「議事」(二) として「学会の今後のあり方について」。総会

一九七八年(昭和五三年)

かれる。 三月 末日 東京教育大学閉学。「研究室での最後の委員会」 開

大学漢文学会牛島徳次、中村嘉弘。 六月二四日 〈漢文学会々報〉第三七号発行。編輯者、東京教 印刷所、 共立社印刷所。 育

茨城県新治郡桜村筑波大学文芸言語学系事務室内漢文学会。 「庾信の文学について」、後藤秋正「魏晋における『慷慨』 H 昭和五三年度漢文学会大会(於品川文化会館)。 発行所(安

について」、

月洞譲「経典釈文索引編集について」。漢文教育研究会、

金子

六月二八日

〈中国文化

-研究と教育-> 一九八〇、

〈漢文学会々

高木重俊「盧照鄰の文学」、大久保隆郎「王充の古典意

彰男「『帰去来之辞』の指導をめぐって」。総会の議事 | 漢文学会の改組について」。「同窓会暫定委員」、「研究会暫定委員」 として

を選出

九七九年

(昭和五四年)

井啓介「中国現代文学について」、加藤敏 六月二三日 昭和五四年度漢文学会大会(於品川文化 会館)。白 「張九齢の感遇詩につい

いて」、上田武「新学習指導要領の実施に際しての漢文教育のあり て」、青木五郎「荘子郭象序の真偽問題について」、菅野礼行「菅原 道真の詩に及ぼせる楚辞の影響」、謡ロ明「思想教材の図式 化につ

「東京文理科大学・東京教育大学漢文学同窓会会則案」、「大塚 漢文 方法」、加賀栄治「稷下の学の一性格」。総会の議題(二)として 方について」、福田芳典「多様な生徒に対応するための漢文教育の

終束の宣言」。大塚漢文学会発足。 七月三十日 大塚漢文学会第一回委員会(於茗渓会館地下)。 委員長加賀栄治。 学会会則案」の審議。総会次第の

九八〇年(昭和五五年

十一月二四日

第二回編集会議

(於池袋田舎家)。

十月二七日

第二回委員会、第一回編集会議(於大塚奴寿司)。

一月十九日 第三回編集会議

(於池袋田舎家)。

二月二三日 三月十六日 漢文教育座談会(於茗渓会館会議室)。 第三回委員会 (同前)。

四月十二日 五月二四日 第四回編集会議 第四回委員会 (同前)。 (於大塚奴寿司)。

印刷所、 大塚漢文学会伊藤虎丸、内山知也、佐治俊彦(以下四十号まで同じ)。 第三八号発行。大塚漢文学会学会報としての第一号。 共立社印刷所。発行所、茨城県新治郡桜村筑波大学文芸言 編輯者、

_)0

詞構造と連動式」、 広野行雄「革命文学論戦から国防文学論 戦への 小松建男「『古今小説』の古と今」、大塚秀明「現代漢語の介 同日 昭和五五年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センタ

語学系橫山研究室内大塚漢文学会。資料D参照。

秋の歴法に就いての試論」。 昭「漢文教育の問題点」、中野達「陶淵明と『列子』」、 応物の文学」、町田静隆「五十七年度指導要領と漢文教材」、宮本佳 連続性について」、安藤信広 「駱賓王の文学について」、松本肇「韋 小嶋政雄「春

俊彦、

阿川修三。

同日

昭和五八年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センタ

一九八一年(昭和五六年)

六月二七日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八一、〈漢文学会々 第三九号発行。

ける人道主義・人性論をめぐって」、 漢文教育をめぐる諸問題につ いて」、佐治俊彦「現代中国文学に於 **勧晋王牋』について」、篠原有太「入門期の一指導」、杉田進「高校** 阿川修三「台湾時代の章炳麟について」、大上正美「阮籍の『為鄭沖 高橋明郎「『論語全解』について」、 同日 昭和五六年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センタ 沼口勝「陶詩の序をめぐって」、 鷲野正明「帰有光と寿序」、

国語Iの漢文」。

一九八二年(昭和五七年)

望月真澄「上古中国語に於ける唇音声母の一特性」。

六月二六日 第四十号発行。 〈中国文化 -研究と教育--> 一九八二、〈漢文学会々

> 「論語の指導」、中野達「独化と往復」、牛島徳次「現代漢語の虚詞 について」、渡辺雅之「一授業の展開例としての故事成語」、謡口明 人拾い読み」、高橋均「『春秋事語』について」、沼口勝「阮籍の賦 白井啓介「文明新戯と現代話劇」、 同日 昭和五七年度大塚漢文学会大会(於豊島区民センタ 伊藤虎丸「『語絲』の周

一九八三年(昭和五八年)

について」。

報〉第四一号発行。編輯者、伊藤虎丸、松村英夫、大上正美、佐治 六月十八日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八三、〈漢文学会々

)0 中野将「庾信『詠画屛風詩』二十四首について」、高橋明郎

「文路公の詩について」、加藤敏「初唐詩と陳子昂について」、安藤 抄本論語義疏をめぐるいくつかの問題」、 ついて」、桜田芳樹「名とタブー」、沼口勝「阮籍賦考」、高橋均「古 信広「『詩経』と『楚辞』への視点」、伊藤虎丸「魯迅の故事新編に 青木木菟哉 「新教育課程

一九八四年(昭和五九年)

井文雄「漢文教育の諸問題」。

六日 月例会。吉田聡美「李賀における時間の形」、

田

部

淵明の帰鳥詩をめぐって」。 二月十二日 月例会。吉原英夫「游俠としての韓信」、 松本肇 陶陶

と『预备』の現われ方について」、 五月十三日 月例会。阿部博幸「『四世同堂』における 国金海二「江戸時代の助字研究 一准

について し

報〉第四二号発行。 六月十八日 安藤信広、阿川修三(以下四三号まで同じ)。 〈中国文化―研究と教育―〉一九八四、〈漢文学会々 編輯者、 伊藤虎丸、 謡口明、大上正美、 、佐治俊

口真由実「杜甫の戯題詩について」。 漢文教育における教材について」、谷川英則、金子彰男、 **堀池信夫「東漢の『読為』について」、樋口靖「白先勇論」、上田武** 名詞について」、 助組合教育会館)。阿川修三「章炳麟について」、相原茂「身体部位 陶淵明の年譜上の問題点について」。漢文教育シンポジウム「高校 四日 同日 月例会。 昭和五九年度大塚漢文学会大会(於東京都教職員互 松本肇「韓愈の詩にみる攻撃性の変容について」、 島田弥生「陶淵明の『帰』をめぐって」、谷 加藤章。

一九八五年(昭和六十年

松本肇「杜甫における『杖藜』について」。 六月二二日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八五、〈漢文学会々

十日 月例会。中野将「庾信の銘をめぐる幾つかの問題」、

第四三号発行。

沼口勝 指導法をめぐって」、加藤章、 と戒詩について」。漢文教育シンポジウム「高校漢文教育における その家書について」、中村俊也「莊存与の『春秋要旨』について」、 特質をめぐって」、 合教育会館)。 「阮籍の四言詠懐詩について」、中村嘉弘「襲自珍の『宥情』 同日 昭和六十年度大塚漢文学会大会(於東京都教職員互 加藤敏「元結の詩について」、白井啓介「傅雷と 阿部博幸「『別個』考」、増野弘幸「豳風七月の 町田義春、菅原直香、 渡辺雅之。昭

和六一、六二年度委員長水沢利

十一月

三日

月例会(於桜蔭会館)。

加固理一

郎

「李商隠

0

初 期

の詩風について」、松村茂樹「『山堂清話』について」。

一九八六年(昭和六一年)

彦 報〉第四四号発行。編輯者、伊藤虎丸、謡口明、大上正美、 六月二八日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八六、〈漢文学会々 安藤信広、佐藤一樹、 阿川修三(以下四五号まで同じ)。

倒』について」、中野将「江淹の詩について」、佐藤一樹「梁啓超の 国理一郎「李商隠とその周辺の詩人たち」、谷口真由実 「杜甫の 『僚 助組合教育会館)。 同日 昭和六一年度大塚漢文学会大会(於東京都教職員互 谷口匡「韓愈の貞元年間の書簡文について」、加

文訓読の送り仮名法について」、吉原英夫、木村秀次。 なる漢詩文についての二、三の問題」。漢文教育シンポ ジウム「漢

ジャーナリズム活動について」、青木五郎「日本古典文学の典拠と

ついて」、安藤信広「『文心雕竜』について」。

十二月 七日 月例会(於桜蔭会館)。三上英司「韓愈の墓誌

銘

一九八七年(昭和六二年)

六月二七日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八七、 第四五号発行。 〈漢文学会々

の思想分化」、大塚秀明「いわゆる『欧化語法』について」、 助組合教育会館)。松村茂樹「項元汴収蔵の千字文編号について」 の古文から駢文への転向について」、小谷一郎「一九二〇年代中国 小野塚相三「『公孫龍子』守白の論について」、加固理一郎「李商隠 同日 昭和六二年度大塚漢文学会大会(於東京都教職員互 沼口勝

六四年度委員長、水沢利忠。文の位置」、安藤信広、長瀬瑞己、大上正美、謡ロ明。昭和六三、文の位置」、安藤信広、長瀬瑞己、大上正美、謡ロ明。昭和六三、来期について」。漢文教育シンポジウム「総合国語の中にお ける漢来期について――陶淵明の場合」、高橋均「『論語義疏』の日本伝

中村俊也「公羊学の師承」。十二月十三日 月例会(於桜蔭会館)。中野将「江淹後集と『才尽』」、

一九八八年(昭和六三年)

てす『韓非子』「解老篇」について」、坂口三樹「陶淵明の園田につい『韓非子』「解老篇」について」、坂口三樹「陶淵明の園田につい三月十二日 月例会(於筑波大学学校教育部会議室)。菅本大二

九華山行」。漢文教育シンポジウム「大学における漢文教育の現状「「論語義疏』における邢昺疏竄入について」、志賀一朗「王陽明と経における鳥について」、大上正美「鍾会をめぐる一試論」、高橋均文について」、中田伸一「烟花三月下揚州について」、増野弘幸「詩相三「『墨子』の尚賢篇の成立について」、加固理一郎「李商隱の祭助組合教育会館)。菅本大二「『韓非子』喩老篇について」、小野塚助組合教育会館)。菅本大二「『韓非子』喩老篇について」、小野塚明組合教育会館)。菅本大二「『韓非子』喩老篇について」、小野塚明組合教育会館)。菅本大二「『韓非子』喩老篇について」、小野塚明祖合教育会館)。

評価について」。 「現代中国語における存在麦現について」、阿川修三「李沢厚の孔子十二月 三日 月例会(於筑波大学学校教育部会議室)。阿 部 博幸

高木重俊、

内山知也、

青木五郎、

田部井文雄。

九八九年(昭和六四年、平成元年)

って」。 「近代思想史の枠組の再検討」、加賀栄治「『礼』経典の定立 をめぐ三月十一日 月例会(於筑波大学学校教育部会議室)。佐藤 一樹

郑〉第四七号発行。 六月二五日 〈中国文化―研究と教育―〉一九八九、〈漢文学会々

静隆、毛利順男、田部井文雄、謡ロ明。平成元、二年度委員長水沢 完略史」。漢文教育シンポジウム「新学習指導要領について」、町田 に井啓介「中国話劇の台詞について」、中田伸一「蘇軾の黄州寒食 自井啓介「中国話劇の台詞について」、中田伸一「蘇軾の黄州寒食 はる。村田和弘「『二拍』の物語とその評価について」、 東大策「明代白話に はる。 に在V』の成立」、牛鳥徳次「日本における中国語文法研 にかし、 にが、中田伸一「蘇軾の黄州寒食 はいて」、 中田伸一「蘇軾の黄州寒食

解釈をめぐって」。 秀明「『官話』という言葉につ いて」、加藤敏「『輞川集』の構成と十一月二五日 月例会(於筑波大学学校教育部第二会議 室)。大塚 利忠。

一九九〇年(平成二年)

について」。
『馬』と『鷹』」、河内利治「黄道周の『書品論』
聡子「杜甫詩中の『馬』と『鷹』」、河内利治「黄道周の『書品論』
三月 十日 月例会(於筑波大学学校教育部第一会議室)。間宮

報〉第四八号発行。編輯者、髙橋均、謡ロ明、大上正美、安藤信広・六月二三日 〈中国文化―研究と教育―〉一九九〇、〈漢文学会々

小谷一郎、白井啓介(以下四九号まで同じ)。

授業の起承転結」、青木五郎「中国における古典教育」。 王弼注における道と無」、安居総子「論語の指導」、小倉勇三「漢文ついて」、中村俊也「魏源の公羊学について」、中野達「『老子』の文学と思想について」、上田武「天道幽且遠」、阿川修三「周予同に詩における水石の描写と元結の詩文について」、安藤僖広「嵆康の組合教育会館)。谷口匡「朱彝尊の詩論をめぐって」、加藤敏「初唐組合教育会館)。谷口匡「朱彝尊の詩論をめぐって」、加藤敏「初唐組合教育会館)。谷口匡「朱彝尊の詩論をめぐって」、加藤敏「初唐組合教育会館)。

九九一年(平成三年)

魯迅小説の語彙語法について」、吉原英夫「李陵の禍について」。

一日 月例会(於桜蔭会館)。大塚秀明「初出誌における

十二月

六月二九日 〈中国文化―研究と教育―〉一九九一、〈漢文学会々とその周辺」、白井啓介「中国映画の現状と問題点」。 三月 九日 月例会 (於桜蔭会館)。平野和彦「康有為の芸術論三月

第四九号発行。

〔資料A〕

学会発会式

後一時より、本館第二会議室にその発会式を挙げぬ。職員・先輩・我漢文学会は、いより~その機を得て、玆に昭和七年二月二十日午学校内外の久しき待望の中に、発会の準備をさをさ怠りなかりし

学生・生徒、凡べて参会者百有余名に達し、式は盛況裡にいと厳粛

に進められたり、その次第概況左の如し。

D 発会式

一、経過報告

、会長挨拶

藤川熊一郎君田波又男君

島

大方の御参列を戴きまして、遂に今日に於て漢文学会り、我が学会創設の機運も亦熟しまして、遂に今日に於て漢文学会激し、自らの責務の重大さを痛感致したのであります。此の時に当然、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、は、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、は、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、は、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、は、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、然る当れる機会とを待つ為に遂に今日に及んだのでありました。然るは、昨今のことではないのであります。が、漢文学会発会の式を挙げ得ました事は、北く大方の御参列を戴きまして、送に今日に於て漢文学会発会の式を挙げ得ました。

所は、 らば学会の使命は実に広く大きいのでありますが、 相互の結合に於て、 然るが如く、 発会の儀を見るに到りました。抑々学会は他の何れの学会に於ても 学風の樹立に在る。 其の自由なる研究によって課業の欠陥と不備とを補ひ、 学園の完全なる発達を期すべきであります。 本学は今にして始めて諸制の完成を見た 其の先務とする

弁を振はれたり。 竹書紀年につきて 行不」由、径

、道を論じて孫中山に及ぶ 閉会之辞

教

諸

原 男 博 先生

小 小

林 信

ぎ玄関前に記念撮影を終へ、意義深き今日の発会式を了へぬ。 かくて何時しか時は移りて五時半に及び、 暮色漸く迫りし かば急

(\equiv) 懇親

佐藤 先づ諸橋教授の挨拶あり、 (正範)、浜野の諸先生交々立って漢学の大使命を高調せられ 直ちに場を神田維新号に設け、 評議員以下約三十名の出席者を得て歓語、 次いで松井博士、 午後六時より懇親会を 塩谷博士、 田口、

若き学徒を激励せられたり。

を音吐洪亮朗吟せられ、満座三嘆を禁じ得ず、 酒杯幾度か廻り、 小林君の詩吟等、 宴漸く酣なるに及べば、 尽くるなき興を添へて、 塩谷博士得意の桜井駅

続いて原先生の支那 春未だ到らざるに

にまち、

会員諸子の努力によって、

切に希望して休まない次第であります。

が学会の貴務は実に重大である。幸にして御参列の諸先生の御指導

天下に資する所あらんとする者であります。 り既に有する堅実なる学風に素して、 下諸学の動きに注意して、

諸学の長を取り、

東西の粋を聚め、

固よ

後刺たる研究を興し、

以って

此く考へますると、我

向を見まするに、

夫々拠って立つ処がありますが、

一長一短であります。

我々は、

直に斯学に於てのみでなく、

広く天

新鮮にして気概あらしむべきであります。

立派な学風を樹立して来てゐる。

然し我々は此の学風をして、

更に

今東西に於ける斯学の傾

仔細に検すれば

勿論既に学校の性質に即して、

学であります。 と言ひましても、

此の赫々たる歴史は、

其の実は光輝ある六十年の歴史を背影としての大

開けり。顧問、 Ŕ 発会式後、

本学会の機能をして遺憾なから (文責在筆記 民謡、 時散会せり。 春風座に満ち、 我が学会の前途まことに洋々乎たるものありき。九

記 念講

演

評議員挨拶 顧問祝辞 学長祝辞

内 服 大

野 部 瀬

授

博 教

> 畏 +

発会式に引続き直ちに記念講演に入り、 次の順序を以て、 夫 々

(156)

〔資料B〕

復刊の辞

田

復

竹

是れ偏えに会員諸君の熱誠な後援に依るもので、深く感謝する次第 相俟って、会報の復刊を企図し、 の方法などに就いて幾度か会合考究の結果、 序の恢復とともに、会員諸君の旺盛な攻究精神に答えるため、発表 何等かの方法が講じられねばならない。我が漢文学会では、 を有する各地の大学では、 満足を与え得ない現状である。従って研究室を中心とする研究機関 の年報は、 の運びになったことは、 の中国学会が成立し、多年の懸案が実現され、 に堪えない。 **奻に復刊第一号を発行し得ることになったのは、学界のため御同慶** が漢文学会会報は、 経費の関係から紙数にも制限があり、多数会員の要望に 中国に関する学会は、一昨年の秋、 既に御承知の如くである。しかし中国学会 昭和十七年度で休刊のやむなきに至ったが、 その所属研究者の研究を発表し得る為、 今回漸くその実現を見るに至った。 年一回の研究発表会と 年一回の年報が発刊 綜合されて全国的 世の秩 ある。

触れ、その考え方をつきとめ、それから表われる抽象的具体的事象せよ、何れも生きた中国人の所産である以上、先づ人間の生き方にるものと思う。思想史的研究にせよ、経子学・文学・語学の研究に戦争を契機として、中国学問研究の方向は、一転機を劃しつつあ

である。

も充し得たことを心から喜び、 史と左提右携、 究室としては、 学の研究は、殆んど未開拓のまま取り残されている。この点は我研 い。この方法はそのまま日本漢文学の研究に転用される。 可能である。存在をそのまま対象とすることは、 ものは何か。いかに把捉したか。それが解明されでこそ学的攻究も うち立てられたものといっても過言ではない。 べては彼等の把捉した真の生命・真の実在が基盤となり、その上に 態度も確立される。 へと歩みを進むべきで、妓に新しい研究の方法も発見され、 この復刊によって、会員諸君の真摯熱烈な研究意欲を、 意義深い文化財を今日に生かすことに努力したい。 是非手を着けねばならない。 中国の学問のすべては、 今後の発展を希望してやまないので 国文・国語乃至は日本 人間の探究である。す しからばその真なる 戒しめねばならな 一部分で 日本漢文 研究の

記念号刊行の辞

長内野熊一郎

会

る。此の意味で、本記念号を、私は学会の責任者として、無限の愛て、その破邪顕正の教示に省思すべく、切に期する所あるものであ会のそれぞれの分野を象徴する人材である。之が月旦は、即ち我が会のそれぞれの分野を象徴する人材である。之が月旦は、即ち我が京記念号として、世に送る。執筆者の諸氏は、みなこれ現下我が学式記念号として、世に送る。執筆者の諸氏は、みなこれ現下我が学東京文理科大学漢文学会は、会報第十四号を、母校の発展的閉学

資料C)

発 刊 0 辞

今回、その会報を漢文学会会報第十五号として発刊することになっ 東京教育大学漢文学会は、東京文理科大学漢文学会の後を承け、

中

西

清

た。 多大の犠牲を払って、 経費の点からみて、 今日、人文系の学会で、学術の専門的研究の会報を出すことは、 洵に欣ばしい次第である。 非常に困難とされている。 昨年に引続き、本会報を発刊されたことは誠 しかるに会員諸賢が

ることなく、 日本漢文学に関するもの各と一篇程度に過ぎないが、 に感謝に堪えない。 さて本誌掲載の論文は、 今後もます~~研究の成果を発表されるよう切望して 紙数の制限上、 僅かに経学、 これに失望す 子学、

展的逝遷を送り、

るものである。

期待と切願と決意とを盛って、懐しい母校文理科大学漢文学会の発

且輝かしい教育大学漢文学会の再生を迎へんとす

うか今後も更に研鑽を続けられ、 止まない。 発展に寄与せられんことを祈る。 の論文は、わが会員諸賢の平素の研究の結実したものである。ど われく、学徒の生命は、倦むことなき学問の研究であり、会報誌 会報の内容を充実して、わが学会

会友並に学界江湖に捧げたい。 翼々たる恐心と、 烈々たる自己改造の決意とを以て、 慎んで

抑々我が学会は、

故穆堂鳥田教授を会長に戴き、

田波学兄総代と

報第一号を創刊、 孜々切瑳して月将の旅をつゞけ、 永い過去千態の謝恩と友要と感懐とを覃め、遙かなる未来への新生 定年退職せられるに及んで、不肖その後図を汚し、 進向づけを呈示せられたのである。二十七年三月、 和二十六年十一月復刊第十三号を公刊して、 戦時中、 して昭和七年二月創設せられて以来、 竹田教授会長に就かれるや、 数年の休刊雌伏はあったが、諸橋・内野(台)両会長を経 些さか学界眷顧の恩義に酬いたのであった。 遂に昭和八年三月には、 斯学復與の英図を実現せられ、 斯学の研究と普及とを目標に、 先づ本学会の新抱負と 今此の記念号に、 会長竹田教授の 待望の会 昭

けに、 朋凡て二百有余。英材をいだきつゝ、既に幽明を異にした丈夫も幾 今や道義の自覚高揚は、 生順逆あり、勢ひは時として吾らに已みがたい所。されど、それだ 人か。私はそれらの明霊を悼みつゝも、 憶へば、万感交々至る学会二十有四年の精進史であった。 軽毛の一己は敢へて堵せんとするもの。 成敗事に臨んでの吾人が進止は、 一言万思、 同朋と共に往き、 真理の探求に一歩先んじて三思さるべきで 偕学偕成、 省思清明であってほしい。 誓を固くするのである。人 倖に諒せられよ。 道の純粋確立の為に 会友同

上

(二八・三・一八稿)

(158)

〔資料D〕

新 たなるいで立ちにあたりて

委員長 加 賀 栄 治

響くであろう。 しく言挙げするつもりはない。言挙げは、ことごとしいほど虚ろに いささか装いを新たにしたこの雑誌のとびらで、 今さらことごと

てここに宣言するのは、 々の理解と支援を仰ぎたいからである。 だが、われらの学会とわれらの雑誌の新たなるいで立ちを、 共につどうわれらの心をひきしめ、 世の人 、あえ

性と、恩師・先輩とのえにしに伴う若干の甘えとから、脱却できた となった。これによって、大学の名を冠することに伴う若干の閉鎖 と続いて、 などとうぬぼれるものでは、けっしてない。 かつて、 その大学の名を冠してきたが、今やそれが消えたかたち われらのつどいは、東京文理科大学から東京教育大学へ

える。 かなる道程へと踏み出す足どりも、ともすればしどろになるのを覚 むしろ、重くのしかかってくる大小さまざまの困難を思えば、遙

教育実践にあらんかぎりの力をふりしぼり、時々のみのりを引っさ かぎり、おのがじしその領域において足下を踏みしめ、学問研究と けれども、 今やいで立ったわれらの道程では、 斯の学の永遠なる

索が続けられたことを私たちは知っている。全会員による「同窓

教育大の廃学と筑波問題をめぐって、前の委員会で長い苦悩と摸

会」と自由参加の「研究会」とに分けるという結論に達したのは一

程のかなたの光明を、 としても、人の和こそわれらの最も頼りうるものであるかぎり、 に似た厳しい心の張りを、どこまでも持ち続けようでは 天の時はその帰趨なお定かならず、地の利は今のわれらに傾かぬ われらは必ず手にしうるであろう。 われらは、この出陣の武者振る ないか。 道

げて切磋琢磨するしかないのだ。

対し、願わくは、心からなる激励と支援を賜わらんことを。 斯の学における公正なる批判を甘受しつつ進まんとするわれらに 世の人々よ、われらのいで立ちを見守りたまえ。 (二九八〇・三・三一)

編集後記 独白風に

実は廃止・新設でもあったという教育大と筑波大との関係の現実を と本誌の性格とを物語っていよう。それは、母校の移転・拡充が、 教育―」と名乗りつつ、同時に「漢文学会会報通巻三十八号」と称 忠実に反映しているとも言えるだろう。 するこの雑誌の表紙が、何よりも端的に、我々が置かれている状況 (ここなら比較的安くすむ)、討入り前の赤穂義士のような気持にな ってくる――そらいう事態にもまして、新しく「中国文化―研究と 毎回委員会の場所に困る。寿司屋の二階座敷に集まっていると

つつ、全国的に開かれた、かつ権威ある学会を作っていくことにし道は、この事態を逆に積極的に受けとめて、旧漢文学会をうけ継ぎ後文学会にすること。賛否の"意見"は別にして、現実に筑波大に降文学会においてだった。道は三つしかなかった。第一は筑波大昨年の総会においてだった。道は三つしかなかった。第一は筑波大

かない。

認めて会に加入し、また同窓以外の同僚や学生にも加入を勧めて下 刷費は、 ら、三年で潰れてもよいではないか。事実、本号は旧漢文学会会報 私は、「三年で潰す覚悟を了承して下さるなら、 明されたのは百二十名にすぎない。会費二千円、まともな雑誌を出 う。

しかし旧会員四百四十余名中、 受けてもらった。彼が在職する限りは、その労を担ってくれるだろ っているのではない。"身を捨ててこそ……』とか。また楽しき門 さるか否かに、会の運命のすべてがかかっているのである。 る。本号を見て下さった各位が、こういら会報を出すことに意義を な赤字になる。つまり、私たちは本号に、いわば"賭けた"のであ の最終号であり、同時に「中国文化」 受けよう」と放言した。みじめな内容で醜を天下にさらすくらいな そうと思えば、刊行費の三分の一もまかなえない。昨年の総会で、 かったし、今もない。事務所は取敢えず筑波大の横山研究室に引き だが果してこの学会と会報を維持出来るか。見通しは明るくはな 旧漢文学会から引継いだ全額を注ぎこみ、 現在までに学会加入の意志を表 創刊号でもあるわけだが、 編集委員長を引き なおすでに大幅 印

出ではないか。

御支援を切に御願い申上げる。